天遊

No.35
Autumn 2015
大阪教育大学広報誌

Contents

男女共同参画推進コラム
手をつないで VOL.11
STUDENTS NOW!
ラボ訪問
卒業生キャッチ
附属学校園ウォッチ
本読みのススメ 第12話
TOPICS

特集1
地域力を結集した安全教育の新基軸
セーフティプロモーションスクール

特集2
就職最前線 対策の二本柱

国立大学法人
大阪教育大学

地域力を結集した安全教育の新基軸

セーフティプロモーションスクール（SPS）

学校危機メンタルサポートセンターは、2001年の附属池田小学校事件を受け、トラウマの回復と学校危機の管理を目的として発足し、以来、日本の学校安全教育を牽引しています。
同センターが進める、学校安全の新たな認証制度「セーフティプロモーションスクール（SPS）」について、藤田大輔センター長に話を聞きました。

学校危機メンタルサポートセンター
センター長

ふじ　た　だい　すけ
藤田 大輔

2004年から大阪教育大学教授に就任し、2007年から4年間,附属池田小学校長を併任。その後、2012年から学校危機メンタルサポートセンター長、2014年からは学長補佐（学校安全担当）を併任。2012年に日本International Safe School認証センターを開設し、代表を務める。2014年には新たに日本セーフティプロモーションスクール協議会を開設。中央教育審議会の学校安全部会委員や初等中等教育分科会委員、文部科学省の学校事故対応に関する調査研究有識者会議委員などを務めている。

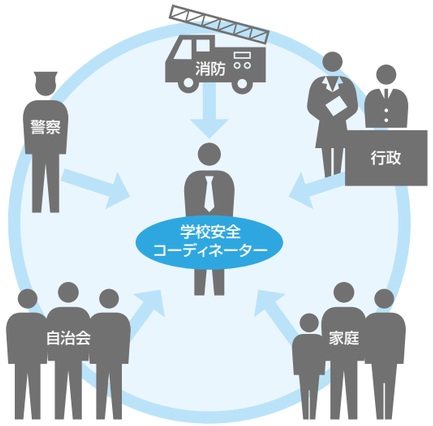
同センターはこれまで、学校安全の認証制度にWHOの研究所が運営するISS（インターナショナルセーフスクール）※1を推進してきました。それをなぜ、新たな制度SPSに移行したのでしょうか？

一つは、ISSの学校安全が、日本の実情を捉えきれないところがあるためです。例えば地震大国日本では、学校安全の取り組みに地震災害への対策も当然盛り込まれていますが、ISSのお膝元スウェーデンでは地震はまず起こらないので，地震対策の概念そのものがありません。このように、生活・災害・交通の3領域を学校安全の基本軸としている我々に対し、ISSでは、気候・風土の違いにより、安全の概念が違うのです。さらに、学校が主役となり地域へ安全の輪を広げることをめざす本センターに対して、ISSでは、学校安全は地域安全における取り組みの一つであり、ベクトルが全く逆なのです。こうした認識のずれが根底にあったこと、そしてISS統括本部であるカロリンスカ研究所が、ISSを同研究所の活動から分離する声明を発表したことが発端となって、文部科学省が日本独自のスタンダードモデルの必要性を提唱しました。そこで、本センターがこれまでの知見を活用し、新しい認証制度をつくることになったのです。

SPSの特徴を教えてください。

トップ主導の欧米型と違い、現場教員による「学校安全コーディネーター※2」が中核となり、地域の専門家と連携して、「チーム学校」を組織することが最大の特徴です。チーム学校は、学校安全コーディネーターをリーダーに、警察や消防、そして保護者など、地域の人々がアドバイザーとなって構成します（図1）。

図1 チーム学校の構成



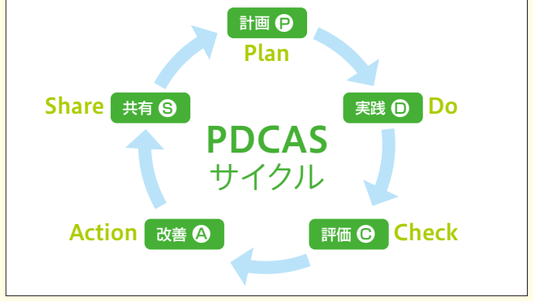
地域との連携がカギということですか？

東日本大震災でも、釜石市の学校など、地域との連携が進んでいるところは押しなべて被害が少ないのです。密接な連携が、日常だけでなく、いざという時にも役に立ちます。

チーム学校はどのように機能するのでしょうか？

7つの指標に基づくPDCASサイクル（図2）で動いていきます。「計画」を立て、「実践」に移し、「改善」するのは、学校安全コーディネーターを中心とした学校ですが、「計画」「共有」に地域アドバイザーの声を反映することで、地域が一体となって学校安全に取り組み、ひいては地域安全に結びつくことになります。とりわけ「共有」が重要で、過去10年間の学校での死亡・事故例700件のヒアリング調査でも、その教訓が学校内でしか共有されていないケースが多く、今後は、活動の成果を地域関係者に広く発信していくことが求められます。安全を築くには，過去の教訓を生かすことが大事で、そのためにどうするかということを皆で共有し、考えていくことが必要です。

図2 PDCASサイクルの展開



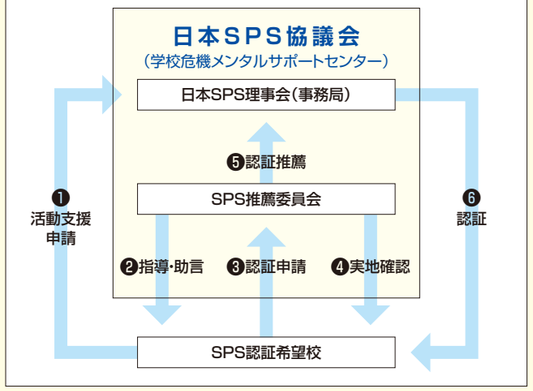
「実践」では、具体的にどんな取り組みが展開されていますか？

避難訓練でいうと、東日本大震災前の東北の学校では、例年6月に実施している所が多かった。しかし、地震が起こった3月は雪まじりの雨が降り、肌寒く、足元はぬかるみ、避難が迅速に進みませんでした。このような教訓を踏まえ、毎年季節を変えたローテーションを考えてもらいます。また、学校自体が避難所に指定されている場合は、地域の人にも訓練への参加を求め、自治会の年間計画ともすり合わせます。もっと身近なものでは、遊具点検などの安全点検を、教員の目視だけでなく実際に使って確かめます。それでも慣れると気づきの力が低下しますので、教員間でローテーションを回したり、保護者の目を入れたりという工夫をしています。また、大人だけでなく、子どもに気づきの力を養わせることも対策の上で大事なことです。

SPS認証はどういった手順を踏むのでしょうか？

認証希望校は、本センターが統括する日本SPS協議会の事務局である、日本SPS理事会に活動申請を提出し、SPSの推薦委員の指導・助言に基づき、活動を進めます。活動実績が1年を超え、認証申請の手続きを踏み、実地審査に合格すれば、SPS協議会への推薦を経て3年間有効の認証が交付されます（図3）。附属池田小学校を筆頭に、附属池田中学校、台東区立金竜小学校（東京都）の3校がすでに認証済みで、京都市立養徳小学校が正式に認証活動に取り組んでいます。このほか、高知県の3校、宮城県の18校が認証に向けた動きを見せています。いずれも、過去に事件や災害が発生した学校・地域で、事故の風化を防ぎ、教訓を生かしていこうという気概が感じられます。また、首相や文部科学大臣をはじめとする政府、国会でもこの制度を高く評価し、活動を支持する旨の答弁を得ており、今後は6か年で50校まで認定を増やす計画です。

図3 SPS認証までの流れ



海外展開の可能性は？

指標はその国の風土に合わせつつ、生活・災害・交通という日本独自の概念を広めていきます。特に東アジアは、地震・水害など災害の種類が共通しているので、親和性も高い。すでに、中国の華東師範大学の研究所と協定を結んでおり、北京の中国教育科学研究院とも協定に向けた手続きを進めています。台湾も関心を示しており、まずはアジア太平洋地域での普及をめざします。

SPSは今後どう発展していくのでしょうか？

安全教育の場は学校だけではありません。SPSの掲げるチーム学校は、地域の人々が相互に働きあい、持続可能なシステムを作ることも使命です。災害により学校が避難所となった際、自治会は高齢者が多く、設営や物資の運搬をするのは体力的に難しい。そこで、若い親世代に活躍の場が出てきます。子どもたちも、普段お世話になっている安全指導員のおじいさん、おばあさんにかわって、自分の両親が汗を流している姿を見ることで、大人を、地域を信頼するようになるのです。そして、20年後には、子どもたちが大人になり、親となって、安全の担い手となる。地域を守る、そのバトンを次世代につなぐことが、SPSのめざす道なのです。

※1　ISS（インターナショナルセーフスクール）
WHOによる学校安全の国際認証制度。学校、保護者、地域が協力し、継続的な学校安全の取り組みを実践している学校が認証される。日本では附属池田小学校が初。

※2　学校安全コーディネーター資格
教員であることが必要条件で、同センター主催の安全主任講習会、もしくは、教育研修センター主催の学校安全コースを受講し、さらに安全コーディネーター研修を受講することで認定される。

Safety Promotion School

就職最前線 対策の二本柱

本学独自の取り組み、教採CAFÉの秘密に迫る

キャリア支援センター運営委員

高橋 一郎准教授に聞く!

教採CAFÉとは？

教員採用試験の対策として、志望自治体が同じ学生同士が自発的に集まり、面接・小論文対策の練習や、筆記試験の情報交換などを行い、全員合格をめざす有志の会です。2015年度では、13地区・連合が活動しており、受験者が少ない自治体の学生は、活発な地区に入れてもらうことも。

設立の経緯

10年ほど前から、同じ自治体を希望する学生たちが自発的に集まり、面接対策の練習をしたことが始まりです。当時は「県人会」と呼ばれていました。県人会参加者の合格率が高いことが口コミで次第に広がっていき、2009年度から大学も積極的にサポートしてゆくこととなりました。2012年に名称を「教採CAFÉ」に変更、現在はキャリア支援センターが連絡網作成の支援、活動場所の提供などに携わっています。

教採CAFÉ5つのメリット

(1)自由な時間に集まって練習できる

授業のように強制されず、学生たちが自由な時間に集まり、何度でも練習を重ねられます。

(2)みんなの学びによる相乗効果

集団で切磋琢磨することにより刺激を与えあい、全体のレベルアップにつながります。

(3)連帯意識とモチベーションの向上

同じ自治体の教員をめざす仲間たちとの連帯意識が高まり、モチベーションの維持・向上にもつながります。

(4)情報の共有

試験に関する情報を共有でき、各自治体に応じた対策を講じることができます。

(5)卒業後もネットワークを構築

卒業後も同期の教員としてネットワークを継続・構築できます。

教採CAFÉの模擬授業

受験者役と試験官役にわけて進行し、自身の感じたことや教育実習・学校ボランティアの経験などを交えたアドバイスを提供しています。

学生の間では
「受かりたかったら教採CAFÉに行け」が
合言葉になっています。

参加方法

採用年度の4月と5月の各教育委員会の教員採用説明会にて、希望者で教採専用LINEグループを作成しています。その後の参加も随時可能です。問い合わせは、キャリア支援センターの窓口まで。

参加学生の声

くぼ あやか
久保 綾香さん

教員養成課程国語教育専攻小学校コース 4回生
大阪府の小学校教諭志望
2015年度教採CAFE大阪府グループリーダー

――どうして教採CAFÉに参加しましたか？

キャリア支援センターの試験対策では、実技内容の専門的なアドバイスが中心ですが、ここでは、話し方やそのスピード、笑顔の作り方など、外枠の部分を重点的に、みんなでチェックしてアドバイスしています。学校現場でアルバイトをしている人も多いので、「この学年では今のスピードは速い」など、子どもの目線に立った意見をもらえるのも良いところです。

――本番の試験で役に立ったことは？

笑顔、声の大きさ、姿勢といった身体からにじみ出る雰囲気は、教採CAFÉで練習を重ねてきたので、本番でも意識できました。場慣れもするので、緊張も和らぎました。

――教採CAFÉならではの良さは？

今まで面識のなかった人とも、教採CAFÉをきっかけに仲良くなれて、新しい友達がたくさんできました。それに、試験間近の時期が心身共につらいときでもあるので、「疲れた」「試験が終わったら飲みに行こうね」なんて他愛もない会話をして気持ちを落ち着かせる効果もあります。

――後輩に向けておすすめポイントをどうぞ

教員採用試験は情報戦です。大阪府の教採CAFÉ専用LINEでは、早く終わった人が面接の内容や雰囲気を書き込んで情報の交換や共有をしていますよ。同じ夢をもった仲間たちと連携協力して合格をめざしましょう！

男女共同参画推進コラム
手をつないで VOL.11

自分のキャリアをライフイベントと
共に描いてみよう！

先般「女性活躍推進法」が成立しました。結婚、出産後も働き続ける女性が増えてきたとはいえ、仕事と家庭の両立は依然大きな課題であり、一方、女性の採用比率が高まった会社では、いかに女性に活躍してもらうか大きな課題です。

最近よく、女性にとって28歳という年齢は、ターニングポイントだと言われます。

厚生労働省の統計では、女性の平均初婚年齢は29歳、平均第1子出産年齢は30歳です。28歳はこの直前にあたり、仕事に慣れ、強みも見えてくる一方で、結婚、出産のライフイベントもリアルに考える時期とみて、キャリア形成の分岐点と受け止められているようです。出産前に責任ある仕事を多く経験した女性は、出産後も早めの復職を望み、復職後も昇進を目指そうと頑張る。出産前の働き方が後々の働き方に影響するため、前倒しでキャリアを「意識的に」形成することが大切だそうです。

ある新聞に掲載されていました「出産前にやっておきたいこと」を紹介します。

(1)「信頼貯金」を増やす。結婚、出産前になるべく仕事を引き受けて経験を積む。会社が手放したくない人材に成長出来ていれば、復職後も職場からの理解や支援を得やすい。

(2)「ロールモデル」(お手本にすべき人物像)を作る。Aさんの仕事の進め方、Bさんの処世術・・・など、複数の先輩からいい部分を抜き出してロールモデルを作り、近づけるよう努力する。

(3)「定年までの見通し図」を書く。横軸を定年までの時間軸とし、予想されるライフイベントや仕事上の出来事を書き出す。長い目で働くということをとらえるきっかけになり、育児に時間を取られるのは一時的だということも分かる。

今後のキャリア形成の一助となれば幸いです。

男女共同参画推進会議
企画専門部会委員　上野山 諭(人事課長)

近年注目を集める、インターンシップの魅力に迫る

キャリア支援センター副センター長

田崎 悦子特任准教授に聞く!

インターンシップとは？

企業などで、自らの専攻や将来のキャリアに関連した就業体験を行うことです。体験目的は、「アルバイトとの違いを知る」「自分の適性を知る」「業界を知る」など学生により様々です。近年は、1、2回生の参加も増えており、キャリア支援センターでは、4月から説明会を3回実施し、インターンシップの意義や効果を伝えています。

授業「インターンシップとキャリア」
"カタシモワイナリー"でのフィールドワーク

インターンシップの種類

「ワンデイ・インターンシップ(企業説明会)」もありますが、本来のインターンシップは、大きく次の3つがあります。

(1)就業体験型インターンシップ

1週間～2週間。実際の業務の一部を担当する就業体験タイプ。

(2)プロジェクト型インターンシップ

1週間～1ヶ月。与えられた課題にグループで取り組むタイプ。

(3)就業実践型インターンシップ

1ヶ月～1年間、長期にわたって実務を行います。このタイプは中小・ベンチャー企業が多く、経営者と直に仕事をすることで、仕事の進め方や経営者精神を学べます。

インターンシップ5つのメリット

(1)仕事を学ぶ

働くことのイメージが明確になり、社会に出る自信がつくとともに、仕事に対する責任感や楽しさ、やりがいも実感できます。

(2)業界・企業を学ぶ

事業や職務の内容だけでなく、実際の職場で仕事することで企業風土や職場環境もわかります。企業選択の指標ができ、選択の幅が広がります。

(3)人から学ぶ

社員とのやり取りや、企業間交渉の観察等で、働く上でのコミュニケーションの大切さを実感できます。

(4)自分を学ぶ

社会で必要な能力を仕事を通して客観的に把握することで、強みや課題、適性を発見できます。

(5)他学生から学ぶ

他学生を見て刺激を受けたり、比較することで、自分の中で当たり前だと思っていたことが実は強みだったと気づいたりも。

リアルな社会を体験できることが
何よりのメリットです!

インターンシップの意義とは？

インターンシップは目的ではなく目標に対する手段です。参加学生に対し、事前・事後研修を実施し、目標を立て(P)、実習先で取り組み(D)、気づきや学び、課題を発表して共有し(C)、新たな発見につなげます(A)。このPDCAサイクルで得た成長を、大学生活に活かすことこそインターンシップです。

参加学生の声

いしはら ゆきな
石原 由希菜さん

教養学科健康生活科学専攻 3回生
プロジェクト型インターンシップ

――どうしてプロジェクト型に参加しましたか？

企業就職に興味がありましたが、どんな企業に行きたいかが見えていなかったので、それなら、社会で戦える力や考え方を身に付けたいと思い、業種職種を選ばないプロジェクト型に決めました。

――活動内容とその成果は？

大学コンソーシアム大阪が主催する地域プロジェクトに約半年間携わりました。真田幸村が甲冑の結び目に用いたことが由来の「真田紐」をアレンジしたブレスレットを作り、「天王寺　真田幸村博」で販売したところ、予想を上回る売り上げでした。

――活動して気づいたことは？

さまざまな種類のブレスレットを用意しましたが、客層は歴史好きが大半で、「六文銭」をあしらったものが大好評で品切れに。客層によるニーズの把握が不十分だったのが反省点です。

――成長できたと感じる部分は？

企画を考えつくまでが大変で、テーマに沿った企画の糸口を見つけるのに、いろんな資料を集め、その情報をもとに自分の考えを確立させて、メンバー間で納得するまで何度も話し合いを重ねました。苦労しましたが、提案力や交渉力も身に付きましたし、ほかの人の企画やプレゼンに刺激を受け、勉強になりました。

――この経験は今後のキャリア選択につながりそうですか？

イベント活動を通して、企画の提案・実行が面白いと感じました。どの業種、どの職種でも企画力・提案力は必要なので、これからの大学生活でもっと磨いていきたいです。

――後輩にメッセージをどうぞ

やりたいことが見つからない、だけど何か成し遂げたいと思う気持ちがあるなら、プロジェクト型に参加してみては？きっと、新たな発見が自分の考えを深めてくれるはずです！

Students Now!

プラカサ・ユダ・ディリラさん

Prakasa Yudha Dirira

教員研修留学生
インドネシア出身

日本の教育の“不”思議”を奥の奥まで

「どうすれば教育現場を変えられるのか？」。2年前、ユダさんは悩みの渦中にいました。地元の大学を修了後、数学教諭として3年間高校の教壇に立ち、その後2年間、小学校で教員コーディネーターとして教育現場を支援しました。そこで、壁に直面します。

「子どもの個性が十人十色であるように、学力にも違いがあるため、どこかに標準を設定する教育はよくない。一方で、小中高とステージが上がるごとに脱落する子どもが増えていくのも、インドネシアの現実で、この負の連鎖を断ち切らないといけない」と考えました。しかし前途には、インドネシアの様々な問題が横たわっていました。「PISAなどの国際学力調査でも毎回最下位グループなのに、政権が変わるごとに検証もなくカリキュラムを改訂します。改訂に着手する権威たちも現場が抱えている問題に目を向けようとしないのです。そして現場の教員も、信じられないかもしれませんが、無免許の者が存在します」

他国の教育制度はどうなっているのだろう？との考えがよぎったとき、学生時代に読んだ学術書で、授業研究に優れていると評されていた日本の存在が頭に浮かびました。「PISAでは毎回トップクラスで、客観的な統計データが教育成果を証明しています。解決の糸口もここにあるのではないか。ぜひ自分の目で、耳で、確かめなければ」と思い立ち、日本国政府の教員研修留学生制度を利用して、単身大阪にやってきました。

本学の留学プログラムの一環として、附属学校での授業参観があります。指導教員の柳本朋子教授に連れられ、そこで日本の学校教育の“不思議”と出会いました。「インドネシアは1クラス32人ですが、日本は40人とそれよりも多い。そんな大所帯でも授業はもちろん、カリキュラムの組み立てや授業準備、理解度の把握などがうまく機能・循環しています。これは驚異的なことですよ」と興奮気味に語ります。「給食の準備や片付けも、子どもたちが行っていますね。そうした学校文化についても、どういう背景があるのか、もっと学校の奥の奥までつぶさに観察して解明したい。ここには、教育現場を変えるヒントが必ずあります」と熱を込めます。

インドネシアのフットボールチームの子どもたちと

高校教師時代のユダさん（最上段中央）

その意欲的な姿勢から、本学の学生とも馴染んでおり、授業ではいつも学生が通訳を買って出てくれるそうです。「授業集中の妨げになっていないか気に掛かっているのですが、本当に助かっていてありがたいです。わたしを挟んで通訳学生が両脇を占める座席配置なので『ユダのサンドイッチだね』って笑い合っています」

日本の暮らしにもなれましたが、ムスリムのユダさんにとって、最初は大変なことも。「焼きそばにお好み焼きなど、おいしそうな食べ物にはどれも豚肉の表記があって参りました。当初は醤油の独特なしょっぱさにも馴染めなかったのですが、今はすしもうどんも堪能していますよ」。お気に入りのスポットはアウトレットモールで、「日本は物価が高いといわれますが、賢く買い物すれば良質で安価な中古品がたくさん見つかります」と満足顔。

インドネシアの良いところは？と尋ねると、「故郷のバンドン！」と即答。「食べ物がおいしく、温泉も湧いていますし、皆とても親切です。妻と4人の子供を残してきたので早く会いたい」と再会を心待ちにしています。

インドネシアに戻ったら、「本学での学びをはじめとする、これまで自分が培った知識・経験のすべてを詰め込んだ学術書を執筆して教師に影響を与えたい。たくさんの生徒に関わるのが一番ですが、直接的な教育指導だけでは範囲も効果も限定的ですから、まず指導者に波及させたい」と希望を抱きます。海外の権威による教育書は豊富ですが、インドネシア人が書いたものはまだまだ少ないそうです。「インドネシアの教育に即したインドネシア人のための本を。現場には情熱と志を持った教師がたくさんいますから、教育の質を高めれば、遠くない将来、日本の良い競争相手になりますよ」

浅野（あさの） 真帆（まほ）さん

Maho Asano

教養学科芸術専攻美術コース4回生
学生広報組織「DAIKYO PRESS」所属
大阪府立四條畷高等学校卒業

人生を変える出会いに

大学生協スタッフにインタビュー取材

「わたし、本当にこの大学でよかったのかな？」、それが、浅野真帆さんの入学当時の偽らざる心境でした。

小さいころから絵描きや工作に親しみ、学校では図画工作の時間が大好き。大学進学の際も、真っ先に美術の道が浮かびました。受験当初は美術大学が念頭にありましたが、美術の、さらに特定の領域しか学べないのは自分に合わないと感じ、今の自分に合う大学はないかと調べた結果、本学の美術コースにたどり着きました。「デザインや絵画、立体と、全般を学べてゼミへ進めることに惹かれました。それに、多種多様な専攻があり、美大に行くよりも多くの個性と交われるのではと思いました」。一浪の末、美術コースに合格。期待に胸を膨らませ、門をくぐりました。しかし―。

「周りの子たちは確立したポリシーや美学を持っているのに、わたしは美術を学びたいといっても、ただ絵が好きというぼんやりしたもので、何をやりたいかも定まっていない状態。その後の明確な将来像も見えていない中、本当にこの道でよかったのか悩みました」。そんな迷いの中、一筋の光が差しました。「DAIKYO PRESS」との出会いです。

学生広報組織「DAIKYO PRESS」は、大学の個性や学生の活躍を、主に同名のフリーペーパーを通して発信するボランティア団体です。出会いは1回生の春、サークル勧誘でたまたま声を掛けられたことがきっかけでした。「浪人時代、気分転換で雑誌に触れる機会が多く、デザインも自分たちである程度自由にできることに興味を持ちました。インタビューや撮影といった未知の世界にも、よし挑戦してみようという気持ちになりました」と当時を振り返ります。

浅野さんの初仕事は、オープンキャンパスに配布するフリーペーパーの企画立案と取材編集でした。「どんなことを取材したいだろうと考えて、『大学生の1日に密着』というタイトルで取材を敢行しました。オファーからインタビュー、原稿の執筆まで初めて尽くしで大変でしたが、苦労が実を結び、形になった時の喜びはひとしおでした」

考えに変化が起こったのは2回生のときです。上級生が卒業や就職活動で不在になり、中心メンバーとしてフリーペーパー制作にも慣れてきたころ、提出した企画書を目にした広報職員の一言がきっかけでした。「『この企画は何のためにするの？』と言われて、はっとしました。ものづくりは誰かが必要としてくれて初めて価値が出るもので、自分が納得したものを作っても、需要がなければただの自己満足ですから」。単純で、しかし、大きな気づきでした。

目的意識の芽生えは、美術への考え方にも影響を及ぼしました。それまで、課題作品に取り組むときは、まずビジュアルに主眼を置いて作っていましたが、目にする人が何を求めているかを意識するようになりました。「ポスターやチラシといった広報物で一番重要なことは、日時や場所といった情報がすぐ目に飛び込むように工夫することです。見た目の華やかさも大事だけれど、文字の大きさや段組みにも気を遣うようになりました」

ゼミでの与えられた課題を、目的意識をもって誠実にこなしていった結果、念願のやりたいことを見つけました。シルクスクリーンという印刷技法を用いた、植物模様をあしらった布のデザインです。「昔からハンカチや手ぬぐいなどのデザインが大好きだったので、オリジナルの模様を手掛けられて楽しいです。でも、自分のこだわりで完結してはいけない。さわやかで清潔感のある、使った人の立場に立ったデザインを追求していきたいです」と嬉しそうに語ります。

DAIKYO PRESSでの活動を通じて、将来は、マスメディアなど広報の仕事に関心を抱いています。「4年間でたくさんの学生に出会い、スポーツやボランティア、海外留学など、信じた道に打ち込むひたむきな姿を追いました。これからも発信する立場から、感動を伝え、そこから何かに夢中になるきっかけを与えたい」と語ります。「夢中になるものがあれば視野が広くなるし、将来へのつながりが見えてきます。わたしの場合は、DAIKYO PRESSが道しるべとなりました。今は、この大学でよかったと心から思えます」

visit the
LAB
［ラボ訪問］

FILE 35

教職教育研究センター
岡田（おかだ） 耕治（こうじ）
教授

「教育現場と学生の橋渡しに」

「恋い焦がれた人に再び出会うことができました」。大阪府岬町で生まれ、岬町で育った岡田耕治青年は、母校の中学校に採用された着任の挨拶で、こんなとびきりの第一声で、国語教師として歩みを始めました。途中、教育行政の世界を経験した後、再び現場に戻り、今年の3月まで小・中学校の校長を務めました。38年間、教育一筋にささげた人生を「毎日失敗の連続ですよ」と前置き、とっておきの失敗談を語り始めました。

「ソフトボール地区大会の決勝の最終回、4点リードするもピンチが広がり満塁の場面。監督のわたしはタイムをとり、『ホームランを打たれても同点だ、楽に行こう』と子どもたちを励ましました。その直後ですよ、ホームランを打たれたのは」。チームはそのまま逆転負け。「今思えば、あのときタイムをとったことで選手に動揺が生まれてしまった。プレーを続行していたら勝っていたでしょうね。それからわたしは準優の岡田と呼ばれるようになりました」と苦笑い。

しかし、と切り出し「準優の岡田は子どもを主人公にしたチーム作りにシフトしてから、優勝の岡田へと変貌を遂げます。通常、監督が打者に声かけするのは、プレー後、ベンチに戻ってきたときです。そうではなく、ネクストバッターズサークルに立つ前に声をかける。ランナー2塁の場面で、『この後送りバントが決まればどうする？ 初球をねらって打つか、それともスクイズを決めるか？』と選手自身に考えさせるのです。教育学者D.ショーンの言葉に『行為の中の省察』があります。行動しながら常にそれを顧みるという意味ですが、これはまさにその実践なのです」

教授としての初授業でもこの鉄板ネタから入り、そこで熟練の授業テクニックも披露します。「『これがあったら絶対教師としてやっていけるスキルは何か？』と問い、普通はここで少し間を取って、『行為の中の省察』と結論を述べます。でも、わたしは間を取る代わりにこの模造紙を貼ります」と達筆な筆文字を見せました。「授業で一番大事なことは、いかに学生の視線をこちらに向かせるか。プレゼンテーションソフトでは画面を切り替えてもここまで誘導できません。模造紙を貼って視線を誘導し、そこから一人ずつ丁寧にアイコンタクトをとっていく。模造紙は最強のプレゼンテーションツールなのです」と力強く断言します。

かつて校長時代には、荒れた学級の隣に校長室を移し、騒がしい教室に自ら乗り込んだり、集団で勉強しづらい子どもを預かったりと、常に子どもの心に寄り添ってきた岡田教授。そんな観察眼のプロが見る本学の学生は「親や教師を困らせないまじめで素直な子たち」。ただ、「その分挫折が少なく、生きるのに必死で勉強どころではない子どもたちに、教師としてうまく接していけるのか不安を感じているよう」と推察します。現場の教師たちはいったい何に悩み、何に喜びを見出しているのか？ その答えは、岡田教授が立つ、もう一つの教壇にありました。

大阪狭山市では、若手教員を対象とした教師塾を開講しており、岡田教授は講師として、アイコンタクトの取り方、表情の作り方など、自らの経験を活かしたプログラムを提供しています。「講義の終わりに毎回アンケートを書いてもらいますが、先生たちの心の内がよくわかります。それを大学で学生に伝え、教師としての心構えを養わせています」と現場と学生をつなぐ橋渡し役を担っています。そして、「つらいこと、苦しいことがあれば、いつでも相談できる我が家のような存在でありたい」と温かいまなざしを向けました。

趣味は俳句で、校長時代には俳句ポストを設けて子どもたちの作品を選句し、全校集会で優秀作を発表していました。その中の一作「こいのぼり風にふかれて歩きだす」は金賞に輝きました。「『泳ぎだす』と紋切り型の表現で満足してほしくない。子どもたちの自由な発想を引き出せるような、枠にとらわれない教師を生み出したい」と語るその瞳は輝いていました。

岡田教授が講師を務める大阪狭山市の教師塾「がじゅまるカフェ」。今宵も若く熱意あふれる教師が集う。

卒業生キャッチ Catch

京都府宇治田原町立田原小学校
教諭
吉田（よしだ） 昂平（こうへい）さん
教員養成課程英語教育専攻
2015年卒

皆が温かいこの町で

柏原キャンパスから宇治田原町まで一時間半、車を降りた途端、茶葉の香りが鼻孔をくすぐりました。周りを山と茶畑に囲まれた田原小学校は、校舎も懐かしさ薫る木造り。「3-2」の室名札がある教室から、吉田昂平教諭の元気な声が聞こえてきました。今は外国語活動の時間。吉田教諭が中心となり、ALT（外国語指導助手）とともに授業を展開しています。train、bus、shipなど、身近な乗り物の英単語とイラストが書かれたカードでのかるた競争に、教室中から歓声が上がっています。

本学在学時に、オーストラリアのグリフィス大学で、2か月間の語学研修を経験したことで、小学生の英語教育に関心をもったという吉田教諭。「言語、人種、価値観、すべてが日本と違うことが新鮮で、鳥肌が立ちました。英語を修得することで、将来の可能性は無限に広がります。小学校なら学級担任として一日中一緒に過ごせますから、時間をかけて英語と英語の持つ力を子どもたちに伝えたい」と語ります。子どもたちにもその熱意は伝わっているようで、「ALTの先生と話すために、『先生は牛乳好き？はDo you like milk?でいいの？』と尋ねてくる子もいて、少しでも英語を使って仲良くなりたいという姿がいじらしくてかわいいです」と笑顔がこぼれます。

今年の4月に新任教員として同校に着任してから半年がたちます。担任発表の際には、見知らぬ若い先生への戸惑いが見られたという子どもたちとも、今では信頼関係を構築できています。ただ、幼く元気な反面、授業中でも、どこからともなく喧嘩が始まることも。学校という社会の場に適応させるため、「静かに、速やかに」と授業前から根気強く、掲示して復唱させるなどして丁寧に説いてきました。そんな姿勢が子どもたちにも伝わったのか、「乱暴な言葉遣いをする子に『そんなん言ったらあかんやろ』という声が上がるようになり、子どもたち自身で仲間をいさめる流れができているようです」と成長を感じています。ただ、「それが呼び水となって新たな喧嘩が勃発することもあるのですが」

授業面では、1学期は子どもたちを引きつけるために導入部分を意識した結果、食いつきよくすることに成功しました。しかし、「導入部分を工夫しても、本題に入ると熱が冷めてしまう。引き付けた注目をいかに維持するかが今の課題です。グループで答えを考えさせたり、ノートを隣同士で交換して丸付けをさせたりと、子どもたちがアクションを起こす取り組みを試行錯誤しているのが現状です」と語ります。

教室での悪戦苦闘を切々と語る吉田教諭ですが、休み時間になれば完全無欠のスーパーティーチャーに早変わり。子どもたちとの遊びはいつでも全力勝負で、校庭を1周するかけっこでは、半周差をつけてのぶっちぎりでゴール。「子どもたちからは『速すぎる！』『先生大人げないぞ』とブーイングを浴びますが、やはり教師として威厳を見せないと」と笑いながら、「一緒に遊ぶことで子どもたちとの距離も縮まるし、子ども同士の関係も見えてきますから」とその重要性を語ります。

その遊びの時間をとれないことが目下の悩み。「丸付けや名簿の整理、行事の準備など、学生のときには見えなかった事務作業に日々追われています。あらためて、世の先生たちはすごいなと感じます」

そんな吉田教諭を支えるのが、同僚や地域の人々の存在です。「校長先生をはじめ先生方が、自身の経験談を語ってくれたり、教材を提供してくれたりと、いつも気にかけてくれてありがたいです。それに、保護者による紙芝居の読み聞かせ体験や、地域の農家による茶摘み体験など、宇治田原町は町ぐるみで学校を支え、応援してくれる。本当に温かい町です」

そして何よりも、子どもたちの笑顔が活力源。「まだ仕事の要領がつかみきれずに大変なこともあるけれど、やめたいと思ったことは一度もありません。毎日、子どもたちの成長に出会え、1日として同じ日は来ないのですから。ああ、もっともっと子どもたちと遊びたい！」

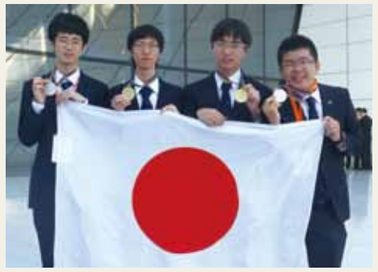
外国語活動授業での1コマ

附属天王寺高の松本 陽行さんが化学オリンピックで金メダルに輝く

「第47回国際化学オリンピック」がアゼルバイジャン・バクーにて7月20日（月）から29日（土）にかけて開催され、附属高等学校天王寺校舎の松本陽行さんが金メダルに輝きました。

同大会は、毎年7月に10日間、各国で選抜された高校生が一堂に会し、筆記試験と実験試験で化学の実力を競うとともに、各国間の交流を深めることを目的に開催されています。今年は75カ国・地域から292人の生徒が参加し、松本さんを含む日本代表生徒が金メダル2個，銀メダル2個を獲得しました。

松本さんは「筆記は高校の授業よりも格段に難しく、結果とともにプロセスも重視され、実験は正確性、迅速性が求められました。これまで日本代表は毎年メダルを獲得しているので、そのプレッシャーから、名前を呼ばれた時はうれしさよりもほっとしました」と大会を振り返りました。将来については、「卒業生の山中伸弥博士のように、科学者になりたいです。ただ、各国の生徒との交流を通して、英語力の必要性も痛感したので、英語ももっと磨いていきたい」と抱負を語りました。



日本代表の4人
（左から2番目が松本さん）
＊写真提供:
公益社団法人日本化学会

「将棋の甲子園」高校生竜王に附属高校平野の下西 哲伸さん

「将棋の甲子園」とも称される、第28回全国高等学校将棋竜王戦（日本将棋連盟、読売新聞主催）が8月19日（水）から20日（木）まで福岡市内で開催され、附属高等学校平野校舎の下西哲伸さん（3年）が初優勝しました。

大阪府代表として出場した下西さんは、4人1組で行われる1次リーグを勝ち抜け、20日に行われた2次トーナメントを5勝して竜王の称号を勝ち取りました。決勝戦は、永世名人である谷川浩司日本将棋連盟会長が棋譜を取る中で行われ、茨城県代表の上村友大さんと対戦しました。

毎日ネット将棋を指して腕を磨くという下西さんは、「強敵揃いで、苦しい試合が多かったですが、最後まで諦めずに戦えたことが全国優勝という結果につながったのだと思います。高校最後の大会だったので、有終の美を飾ることができて本当に良かったです。将棋部のある大学に進学して、団体戦のメンバーになって上を目指したいです」と話しました。

決勝対局の様子
（右:下西さん、右から2人目:
棋譜を取る谷川日本将棋連盟会長）
＊写真協力:日本将棋連盟

全国中学・女子400m自由形で附属平野中の竹村 花梨さんが優勝

第55回全国中学校体育大会が秋田県立総合プールで8月17日（月）から20日（木）まで開催され、本学附属平野中学校の竹村花梨さん（3年）が女子400m自由形で優勝、200m自由形でも準優勝しました。

平日は練習できる時間が短いため、「量よりも質」を大切にどんなメニューにも集中して自分で考えながら取り組んでいるという竹村さんは、400m自由形で「持ち味のスピードを活かして、最初から飛ばしてトップに立ち、後半も粘れた」と自己ベストを更新してゴールしました。200mでも、世界選手権日本代表選手で200メートル自由形日本歴代2位の記録を持つ池江璃花子さん（東京都・小岩第四中）に続く第2位に入りました。

竹村さんは「遊びたい日もありましたが、目標に向かって練習に励んできました。成果が出てうれしい」と喜びを語りました。今後に向けては「日本選手権200m自由形で4位以内に入り、リレーでリオ・オリンピック出場を目指したい。そして、2020年の東京オリンピックでメダルを取って世界でも通用し、みんなから応援されるような選手になりたい」と話しました。

種目	記録	順位
女子400m自由形	4分14秒66	優勝
女子200m自由形	2分01秒59	2位

本 読みのススメ

【第12話】文 楽

大阪日本橋の地にある「国立文楽劇場」は、文楽を含む上方伝統芸能の保存、振興を図るため昭和59年に開場した歴史ある建造物です。元々文楽は、操り人形浄瑠璃専門の劇場の名であったものですが、現在では、日本の伝統芸能である人形浄瑠璃そのものを指す代名詞となっています。

江戸時代前・中期の近松門左衛門や紀海音といった優れた作者の出現によって隆盛してきた文楽は、太夫、三味線、人形遣いの「三業（さんぎょう）」で成り立つ三位一体の演芸であり、1955年重要無形文化財に、また2009年にはユネスコ無形文化遺産にも正式に登録されています。近年補助金を巡る騒動もありましたが、日本の誇るすばらしい芸術と言えると思います。

今回は、この文楽をテーマとした作品をご紹介しましょう。

まず、杉本苑子氏の「埋み火」。－近松門左衛門の生涯－とサブタイトルにもあるとおり、公卿侍でありながら下賤の河原者に身をやつした近松が、障がいのある子供を抱え、妻妾間の諍いに心乱しながらも、『曾根崎心中』『国姓爺合戦』など不朽の名作を世に提示し続けてきたさまを描いています。

続いて、有吉佐和子氏「一の糸」。大正時代、豪商の箱入娘が気晴らしに訪れた文楽で、一の糸（三味線の最も低く太い糸）の響きに心を奪われる。その感動は弾き手への激しい恋心へと高まるも、男は妻子ある身。文楽の芸一筋に生きる男と、一の糸の響きに愛を貫く女の心情を巧みに描いています。

近著では、修学旅行で義太夫節を語る太夫のエネルギーに圧倒された主人公が、周囲の反対を押し切って斯界に入門。三味線弾きとの切磋琢磨の中、幾たびも味わう挫折感。このまま芸に生きるべきか悩みながらも、人を愛することで義太夫節の要諦をつかんでいく、三浦しをん氏「仏果を得ず」もお薦めです。著書のすばらしさとともに、年に一度は本物の文楽に触れてみたいものですね。

（理事：若井祐次）

〈キリトリ〉

天遊vol.35アンケート

●本号でよかった記事を下から選んでください。
（3つまで。その他は具体的にお書きください。）
【　　】【　　】【　　】
（その他　　）

①セーフティ・プロモーション・スクール
②就職特集
③手をつないで
④STUDENTS NOW!
⑤ラボ訪問
⑥卒業生キャッチ
⑦附属学校園ウォッチ
⑧本読みのススメ
⑨TOPICS

●取り上げてほしい記事がありましたらお書きください。
（　　）

●本誌をどこで手にされましたか。
（　　）

●本誌をお読みになってのご意見・ご感想などをお聞かせください。

●次号以降、毎号「天遊」の送付を希望される方は記載をお願いします。
（一度、送付希望ハガキをいただきました方は、再度お申し込みは不要です。）

どちらかに☑をしてください	□次号以降、毎号『天遊』を送付希望します。 □今後『天遊』の送付を停止します。
ご住所 〒	
お名前	
お電話番号	

※お預かりした個人情報は広報誌「天遊」の送付以外には使用いたしません。

OSAKA KYOIKU UNIVERSITY'S Topics

1 留学生に勧めたい「日本留学アワーズ」入賞

留学生に勧めたい進学先を選ぶ「日本留学アワーズ」において、本学が「西日本・国公立部門」で上位校に入賞し、栗林澄夫学長が8月10日（月）に国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された授賞式に出席しました。

同賞は、全国の日本語学校の進路指導担当職員を対象に、外国人留学生に勧めたい大学や専門学校などの進学先をアンケート調査により決定するもので、日本留学を志す外国人留学生の環境整備に貢献することを目的として、一般財団法人日本語教育振興協会が2012年に創設しました。4年目となる今年度は全国日本語学校166校から471票が集まり、部門別に41校が上位校に選出されました。本学は、生活・学習サポートや教育内容等が評価されました。

授賞式で栗林学長は「国立大学の中では小規模な大学だが、地域の方と協力して留学生をサポートしてきたことが評価されたと思う。今後も選んでいただけるように、より一層の環境整備に努めたい」と喜びを語りました。

2 日本インカレ・国体で小林奈央さんが優勝

日本学生選手権水泳競技大会（通称「日本インカレ」）および国民体育大会（通称「国体」）で、教養学科スポーツ専攻4回生の小林奈央さんが見事優勝を飾りました。

小林さんは、9月4日～6日に浜松市総合水泳場で開催された日本インカレで、女子100m・200mバタフライでダブル優勝。和歌山県で9月11日～13日に開催された国体の競泳では、大阪府代表として女子バタフライ100m優勝、さらに400mメドレーリレーにも大阪チームとして出場し、優勝しました。

小林さんは、今シーズンを振り返って「家族やコーチ、先生、先輩、同期、後輩など多くの人が支えてくれたおかげです」と感謝を述べ、「皆さんの期待に応え、来年のリオ五輪代表に入れるように頑張りたい」と目標を語りました。

〈キリトリ〉

料金受取人払郵便

柏原局
承　認
210

差出有効期間
平成28年
1月31日まで

切手不要

郵便はがき

5 8 2 − 8 7 0 5

（受取人）
大阪府柏原市旭ヶ丘4−698−1
大阪教育大学 広報室 行

〈キリトリ〉

※該当する番号を○で囲んでください

あなたのご所属を教えてください

①本学学生	②本学卒業生	③本学保護者
④本学教職員	⑤附属学校生	⑥附属学校保護者
⑦附属学校卒業生	⑧附属学校教職員	⑨名誉教授
⑩教育委員会関係者	⑪他大学教職員	⑫他大学学生
⑬その他（　　）		

公式Facebookページを開設しています

速報ニュースや公式ウェブサイトに掲載している情報を中心に、本学を身近に感じてもらえる記事、写真や動画などを配信しています。是非、「いいね」をクリックしてください。

https://www.facebook.com/OsakakyoikuUniv

LINEスタンプ

好評販売中！

スタンプショップで検索してね！

たまごどり

本誌にご意見をお寄せください。

今後の紙面づくりに皆様のご意見を積極的に取り入れていきたいと考えています。ご感想やご意見、大阪教育大学についてお知りになりたい事などを、はがきまたはwebアンケートでお聞かせください。

天遊Vol.35 webアンケート

「天遊」とは

「天遊」は、荘子の言葉から引用されたもので、人間の心の中に自然に備わっている余裕をあらわしています。キャンパス総合移転の記念に旧師範学校以来の同窓会3団体から寄贈された記念碑に銘文として刻まれています。記念碑の揮毫は水嶋昌（山耀）本学名誉教授によるものです。

UD FONT

本誌はユニバーサルデザインフォントを使用し、植物油インキにて再生紙に印刷しています。
この印刷物は、13,000部を563,760円で、すなわち1部43.37円で製作しました。